

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第13回      メルキゼデクと同じような大祭司イエス①

### 民の罪を執り成せる真の大祭司とは

#### 第7章①節から⑮節      メルキゼデクの祭司職

- ①このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司でしたが、王たちを滅ぼして戻って来たアブラハムを出迎え、そして祝福しました。
- ②アブラハムは、メルキゼデクにすべてのものの十分の一を分け与えました。メルキゼデクという名の意味は、まず「義の王」、次に「サレムの王」、つまり「平和の王」です
- ③彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また、生涯の初めもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司です。
- ④この人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。族長であるアブラハムさえ、最上の戦利品の中から十分の一を献げたのです。
- ⑤ところで、レビの子らの中で祭司の職を受ける者は、同じアブラハムの子孫であるにもかかわらず、彼らの兄弟である民から十分の一を取るように、律法によって命じられています。
- ⑥それなのに、レビ族の血統以外の者が、アブラハムから十分の一を受け取って、約束を受けている者を祝福したのです。
- ⑦さて、下の者が上の者から祝福を受けるのは、当然なことです。
- ⑧更に、一方では、死ぬはずの人間が十分の一を受けているのですが、他方では、生きている者と証しされている者が、それを受けているのです。
- ⑨そこで、言ってみれば、十分の一を受けるはずのレビですら、アブラハムを通して十分の一を納めたことになります。
- ⑩なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたとき、レビはまだこの父の腰の中にいたからです。
- ⑪ところで、もし、レビの系統の祭司制度によって、人が完全な状態に達することができたとすれば―――というのは、民はその祭司制度に基づいて律法を与えられているのですから―――いったいどうして、アロンと同じような祭司ではなく、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があるでしょう。
- ⑫祭司制度に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずです。
- ⑬このように言われている方は、だれも祭壇の奉仕に携わったことのない他の部族に属しておられます。

⑭というのは、わたしたちの主がユダ族出身であることは明らかですがこの部族についてモーセは、祭司に関することを何一つ述べていないからです。

⑮このことは、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられたことによって、ますます明らかです。

「メルキゼデクの位に等しい贖い主としてのイエス」という説明が中断されて、他の事柄（イエス・キリストにおける救いと希望の確信）に言及していたのが、ここでまた引き戻されて6章の終わりを受け「メルキゼデクの大祭司職について」何章かにわたって述べていくことになります。

つまり、著者は第5章⑩節でメルキゼデクについて語ろうとしていましたが、「あなたの耳が鈍くなっているので容易に説明できません」と断った上で、ヘブライ人の信仰を立て直す戒めと勧告を為した後、改めて第7章からメルキゼデクの大祭司論について筆を起し直していることは、色々な意味をもっていることだと思うのです。

先ず、ここをご一緒に味わっていくために、この箇所では引証している聖書の箇所、創世記の14章⑰節から⑳節を読んでみましょう。

「アブラムがケドルラオメルとその味方の王たちを撃ち破って帰って来たとき、ソドムの王はシャベの谷、すなわち王の谷まで彼を出迎えた。いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとぶどう酒を持って来た。彼はアブラムを祝福して言った。『天地の造り主、いと高き神にアブラムは祝福されますように。敵をあなたの手に渡されたいと高き神がたたえられますように』。アブラムはすべての物の十分の一を彼に贈った」

この状況はアブラムが甥のロトを取り返すために他国の王と戦って勝利を収め、ロトや女性たち、その他の人々と共に全ての財産を奪還した場面です。そのアブラムを諸王たちが出迎えましたが、その時にサレム王メルキゼデクはパンとぶどう酒を用意して彼を祝福した。しかも、アブラムに祝福の言葉を与えたのは、メルキゼデクだけであったと書かれています。<sup>36</sup>

このメルキゼデクという人物は実は聖書の中には、沢山は出て来ません。旧約聖書ではたった二箇所、一つは今読んだ創世記の14章⑰節から⑳節、後は今日の箇所の少し後の7章の後半（詩篇の110篇④節）のところにだけです。

そして後は新約聖書までこのヘブライ人への手紙の中に集中的に出て来ます。ですから、このメルキゼデクという人がどういう存在だったのかを私たちが詳らかに尋ね求めようとしても材料はほとんどありません。そういう存在なのですが…。

名前から言ってメルキゼデクというのはメルキ+ツエデクという言葉が、そのように詰まって呼ばれているのではないかと思います。メルキというのは王様、ツエデクというのはツエダカー=正義と呼ばれる言葉なのです。ですから「正義の王」というのが、即ち、

メルキゼデク。神の前に「義なる王」というように言ったら良いのでしょうか、「神の義を携えた王」と、言うこともできると思います。その王は実は「サレムの王様」だと書いてあるのです。サレムという言葉はエルサレムに出て来ますが、そういうような意味の言葉だろうと思います。

このメルキゼデクはいと高き神の祭司である、と同時に、サレムの王であったのです。<sup>37</sup>

第7章①節、

「このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司でしたが、王たちを滅ぼして戻って来たアブラムを出迎え、そして祝福しました」

これは創世記の記事をそのまま短くつづめて説明をしたものです。

続いてすごく面白いことが書かれているのです。

②節、

「アブラムは、メルキゼデクにすべてのものの十分の一を分け与えました。メルキゼデクという名の意味は、先ず『義の王』次に『サレムの王』、つまり『平和の王』です」

ここでは、サレムという言葉に「シャローム」という言葉と結びつけて、「平和の王」と呼んでい

るわけです。ですから「正義と平和」ということは「メルキゼデクによって象徴されている神の一つの意志なのだ」ということになるわけです。

大事なことなことからして、この王様メルキゼデクは先ず正義の君、王であった、そして、それが結果として平和の王となった。「平和を作れば正義があるのではなくて、正義がないところには平和はないという見方が、この手紙の中に布石としてきちんと敷かれたわけです」

それは、私たちがどんなに盛大な礼拝を行おうと、神の儀式を守ろうと、あるいは旧約の律法に書かれた律法の一つ一つの事柄を守ろうとも、あなたがたが正義でなかったなら、それはあなたがたの平和にはなりません、シャロームは一緒にはありませんと断言していることです。

ですから、平和という問題を考えていく上で非常に大切な問題は「私たちが願っている平和が、神の義を全うすることによって、本当に実現される平和なのかどうか」ということをよく考えて見なければならぬことです。

後の方で色々なことが出て来ますから、ここでは余り述べないでおこうと思いますが、少なくともここでイエス・キリストをメルキゼデクと同じような御方（祭司）だと手紙の著者が書いた理由は「イエス・キリストの御姿の中にこそメルキゼデクがあるのだ、真実の正義なる王がイエス・キリストの御姿の中にはっきりと位置づけられているのだ」という印象をもっているからなのです。

それは先ず第一にイエス・キリスト御自身、御生涯の中で人を分け隔てをなさらなかった。これはすごく大事な部分だろうと思います。、主は御自分を十字架に架けたその人類に対して「どうか彼らの罪を赦してください」と祈ってくださった。

主と一緒に祈ってくれと言われて非常に大事な場面(ゲツセマネ)に伴っていった弟子、ペテロ、ヨハネ、ヤコブがその主のたった一度の懇願に応えることができないで眠ってしまった時にも、彼らをお赦しになられた。「もう寝ていてはいけない、これからあなたがたに誘惑が来るのだから起きなさい、さあ、立って行こうではないか」と呼びかけて御自分の側にいる者として彼らを立ち上がらしめられた。

そして主は公生涯の中でしいたげられ、無視され、疎外されている人々と共に喜んで食卓につかれ、彼らを癒したり、励ましたり、望みを与えたりなさった。つまり、律法の名のゆえに差別されていた者に対しても、その差別から回復される道をお作りになった。

「神の義というものは、あなたがたを分断させたり、裁いたりするためのものではなく、あなたがたを本当に神に創られた状態に回復させていくことなのだと言う前提をもった言葉がメルキゼデクにおいては『正義』と呼ばれているものなのだ」と著者は言っているのです。

ですから、ここで手紙の著者が、なぜ、ヘブライ人に向かってこの「メルキゼデク」という人物を用いながら、これから述べようとすることを書いていったのかと言いますと、

「執り成す者、赦す者、受け入れる者、そういう存在としての神は、主イエスと私たち関係をメルキゼデクとの関係になぞらえることにより、もう一度回復しようとなさった」ということを語らずにはゆかなかったからでしょう。

著者はユダヤ教に対して深い知識があり、またそういう教えの中で育っていったヘブライ人た

ち、あるいは、そういう人々の間で信仰訓練を受けた人々によってでき上がっている教会に対して、あなたがたが神に選ばれたのは、「あなたがたの隣人のためです」ということを語りたいのです。そういう部分で「祭司としてのイエス」がもう一度問題にされなければならなかったのではないかと思います。<sup>40</sup>

勿論、この時代までにイエスという御方は「預言者イエス」というイメージがあります。

「神の言葉を告げる者」そして「神の言葉を正しく人々に伝える者としてのイエス」という姿は非常に明確に描き出されています。イエスが「人々はわたしのことを誰と言っていますか」と問うと、弟子たちが答えて言うには「あなたは預言者です、偉大な預言者の一人です」と答えています。あそこでも明らかなようにイエスは当時の社会の中で「預言者としての役割を担った御方として受け入れられていた」のです。

「預言者というのは『神の側に立って民に向かってものを言う存在』です」。ところが「祭司というのは、神から委ねられた責務から言うなら、『民の側に立って神に向かって執り成す存在』です」から、著者によれば「イエスは預言者であるよりもむしろ祭司だったのだ」という意識があったのです。

「人の子イエス」という存在を見つめる時には、あくまで受肉されたイエス、人となられたイエス、私たちの中にいらっしゃるイエス、外から語りかける声ではなく内から私たちを支えてくださる御方なのだ、という認識があったのだらうと思われます。

中世以降プロテスタントの教会が歩み出して、私たちの教会もそれに属しているわけですが、このプロテスタント教会がその後色々なことをして来ました。その中で私が一つ心に留めておかなければならないと思うことは、ルターが、そしてカルバンもそうですけども「万人祭司」ということを述べたのです。「神に選ばれた者はすべて祭司である」ということによって「祭司の階級性」を排除しようとした、言い換えれば、カトリックの伝統的な思想に対する抗議をしたのです」

だから「本来教会は祭司的でなければならないのです」。ところが祭司的であるということは目立たないことなのです、ぱっとしないことなのです。いつでも皆の側に立って皆の重荷を受け留め、神の前に執り成しをし続けなければなりません。

ですから、民の重荷をたえず担い続けてゆく、それが教会であるわけですが、そういう状態を続けて行くことに、教会は甲斐を見出せずある意味で疲れてしまったのです。

だから、今度は格好よくなろうと考える。その場合には教会は何をしたらよいかというと、預言者になれば良いのです。

私たちこそ神に選ばれた者、神の民であり、あなたがたは無理解な方々に神の言葉を伝える者と言えれば格好いいわけです。そういう教会になろうとする。ですから私たちが日常営んでいる教会活動、宣教活動を眺めてみると、やはりそういう意味では上から下へ神の言葉を民衆に向かって語ってゆく神の補助的な役割として教会が用いられていると考えられています。

ですから、預言者としての教会、あるいは見張り番としての教会に徹しようとする、そういう歩みが戦後非常に強くなって来たのです。皆の中に教会が立って共に重荷を担おうとした時に皆の重荷に押し潰され、その中に埋没してしまった教会、そういう反省に立って教会はやはり民の側に立っていたのでは駄目で、神の側に立たなければいけないのだと考えた結果、預言者になってしまったのです。祭司を止めてしまっ…。

ところが「本来教会は『民の側に立ちながら、神との距離を縮めてゆく役目を果たさなければなりません』から、これが一番大変なのです」。自分だけ勝手に神との距離を縮めておいて民衆とは離れてしまって、そのままいいのだという見方をしている教会がもしあるとすれば、教会が教会であるという本来的な使命から逸脱してしまっているのではないかと思います。

それはこの手紙が書かれた時代に既に始まっていわけです。

だから「この著者が『教会の祭司性』というものをもう一度考えて欲しいとの訴えを起

こそすわけです。キリストは、指導者になろうとしたわけでもなければ、支配者になろうとしたわけでもなく、祭司になろうとしたのです。いや、既にキリスト御自身は祭司だったのです。その祭司の役割こそが、あのカルバリの十字架だったのです」そういうことを本気になって語りかけようとしているのです。

聖書学者というのは、割り合い外側から聖書を眺めることができ、自由に発言できる立場なので、色々なことを言われていますが、「新約聖書の中で、信仰の本質について多少神学的な発言をしているのは次の三つの書簡だけです、述べている方があります。」

それは「ローマの信徒への手紙」です。パウロが手紙を書いた時に「教会そのものが、この世に対して果たさなければならない役割は何かと言ったなら、多くの人々に、『あなたがたは罪のしがらみから脱却することができます、あなたがたをがんじがらめにしている罪は既に解決されているのです』と告げる。それが信仰なのだと語る。」そういう立場で教会とか宗教とか信仰とかいうものを語っているのが、ローマの信徒への手紙なのです。

そうして、その次には何があるかという、神の憐れみによって罪から解き放たれた人々には、「神が私たちのために開いてくださった祝宴に、はべることが許されているのです。そして、あなたがたは神の豊かなもてなしを受られるのですよ」と書いている「エフェソの信徒への手紙」です。

最後に三つ目の「ヘブライ人への手紙」では、「そのようにして、あなたがたは罪を赦され、神の祝宴に招かれ、全世界を支配し給う神の王座に近づけるのです、信仰とは神の王座に近づいてその傍らにはべることなのです」と告げています。「神の近くに人々を導いてゆく、神の近くにはべるために必要な役割は旧約の歴史の中では『祭司の務めだったのだ』という言い方をしているわけです」。これは、すごく面白いなと思うのです。

信仰とは、私たちが楽天的に生きるようになるためとか、何があっても心配なく生きられるようになるためとか、あらゆる時代に勝利者として生きていくことなのだ、としばしば提示されていますが、信仰とは神の玉座の近くにはべることだという定義をもっと進めて行けば、パウロが言ったようになるわけです。「キリストと一つになること、神と一つになること」それこそが信仰の極致なのだ、そのためには神に何としても近づかなければならない、神に人間を近づかせるために、神がお作りになった制度は、祭司という務めがその役割を果していたのだ、だから「イエスは祭司の中の祭司、大祭司なのだ」と先ず言うのです。<sup>44</sup>

その次にまたすごく面白いことが書かれています。

### 第③節、

「彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また生涯の始めもなく、命の終わりもなく、神の子に似たものであって永遠に祭司です」

この③節は色々な聖書的読み方があると思います。

ある聖書学者の方が「こんなことはどこにも書いてなく、ヘブライ人への手紙の著者がイエスという御方を強調するためにそう書いたのだ」と言っているのです。でも、もしそうだとすれば、③節はあっても意味がないので正典の中から削られてもいいわけですが、③節が残っているということは、もっと他の意味があるのではないか、積極的に考えられるのではないかな、と捉え直して読んでみました。

すると面白いことに気がついたのです。というのは「旧新約聖書の中では優れた人物を紹介する時に先ず『系図』を書いているということです」

例えば、主イエスの紹介です。

マタイによる福音書では、「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」と記して連綿とアブラハムからのことを書いているわけです。つまり、系図がある人間だったら当然その系図がそこでは引用されたでしょう。ところがメルキゼデクには系図がないとすれば、突然現れた存在ということになる。過去にそういうのは、聖書の中にのでそういう存在はフィクションではではないかという見方をされていた。

ところが、この手紙はこの部分を「彼の論法」に従って書いているのではないかと思割れるのです。

「メルキゼデクについてはお父さんについての説明もない、お母さんについての説明もない、系図もない、彼にとってそんなものは一切必要なかった。」だとすると、忽然と現れた存在で、そんなことは私たちの仲間にはかつてなかったということです。即ち、私たちの中に私たちと同じような仕方で存在に至ったのではなく、別な形で存在するようになられたお方なのだ、だから彼は、受肉された神の御子に似たもの（御子の予型）なのだという捉え方をしていくわけです。私たちの仲間なら皆系図を持っているし父も母もあるわけです、誕生日もあるし終わりの日もあるわけですが、この人にはそういう日はなかったのですから。

よく教会学校で12月25日は主イエスのお誕生日だから皆で喜んでお祝いしましょうと教師が言うから「本当？」って聞くと変な顔をする、そこで、「主は実はずっと以前から地上にもいらして、たまたま私たちの中においでになった。25日は、主がイエスというお名前でお来臨くださった日なんです。だけど何となく誕生日という言葉で呼んだ方が分かりやすいから、そう呼んでしまうんだけどね。イエスは確かに処女マリアよりお生まれになったという形はとられたけれども、その日に誕生されたのではなく、既に神によって最初から存在されていた御子がそのような赤子の形をとられてこの世に受肉なされた日なんです。」と説明します。

以前からいらっしゃった御方だということが「イエスの先在性」ですね、先に存在していたという…」そういうイエスのことを考えると、この著者が「生涯の始めがなかった」というメルキゼデクになぞらえているのは正にその通りです。

第④節、

「この人がどんなに偉大であったかを考えて見なさい」

メルキゼデクがどんな存在だったか、今度は別の角度から切り込みながら面白く書いています。

イスラエル民族にとって一番偉い先祖「アブラハム」、その御方でさえも最上の戦利品の中から十分の一を献げたのです。著者は、「あなたがたは『アブラハムのためならば』といって献げ物をするだろうけれども、そのアブラハムがメルキゼデクに十分の一の献げ物をしているのです。と述べて、暗に、アブラハムがメルキゼデクを偉大な祭司として認めたことを言い表しています。

#### 第⑤節、

「ところで、レビの子らの中で祭司の職を受ける者は、同じアブラハムの子孫であるにもかかわらず、彼等の兄弟である民から十分の一を取るように、律法によって命じられています」

祭司には、イスラエルの人々が収入の十分の一を献げて生活費を支えるようにという決まりが律法にあって、他の人たちには嗣業として土地が与えられるけれども、レビ族には与えず、ひたすら神に仕えています。よって人々に代わって全生活を神に仕えることに集中させているので、彼らは十分の一を献げてレビ族の人々を支えているのです。言い換えれば、「あなたがたの人生は、レビ族の祭司等の執り成しによって絶えず保証され続けているのです」と言っているのです。

#### 第⑥節、

「それなのに、レビ族の血統以外の者が、アブラハムから十分の一を受け取って、約束を受けている者を祝福したのです」

レビ族なら当然だけれども、レビ族でない者がそういうことになったとすれば、事実上は律法が破棄されたことになるのです。相当強引な理屈ですけどね。

「レビ族の一番中心人物であるアブラハムさえ十分の一を献げて祝福を受けたのだからレビ族以外の者が祭司になったことはあったんだよ」と言えましょう。

そしてこの辺については、福音書の中にも「ナザレから何の良い者が出るもんか」という話が出てくるわけです。

要するに旧約の連綿とした歴史の中では「レビ族からは優れ指導者は出るだろうけれど、ナザレからなんか出やしないよ」と言っているわけですね。

ところが著者は「メルキゼデクこそ、神の御子ナザレのイエスに似た者だ」と言っているわけですから、「その人に対してアブラハムが身を献げたと言うことは、レビ族が決して彼以上のものではない」と言っているわけです。<sup>50</sup>

言い換えると、これは「旧約時代に定められた祭司制度の終焉を告げている」のです。そうすると「旧約時代から連綿と守って来た律法主義も今や意味を失った。祭司制度もはやそこでは廃棄された」これはすごく過激な言葉です。これを私たちがさあっと読ん



ただけではそういう部分がすごく過激な文章なのだということは、あまり感じないのですが、よく味わってみるとものすごいことを言っているわけです。

今の教会に当てはめて言えば「教会はそれぞれ伝統的な制度をもっているけれども、もう教会の教職制度なんて余り意味がないよ、とか、教会は独りよがりをしているだろうけれども、あなたたちだけが神の国に行けるのではなく、教会外からも神の国に行ける者が出て来るのだ」と言われているのと同じなのです。

そうすると教会も黙ってはいないです。そんなこととんでもないと言って自分たちを守ろうとする。キリストの教えを守ろうとするのではなく、自分たちの体制や社会的な地位とか、あるいは一般的なものの見方において自分たちの足場を固めようとする。当然そういう動きが起こることをこの時代の著者も想定しながら「あなたがたが頼りにしている律法も、あなたがたが自分たちの贖<sup>しる</sup>い代として養ってくれると信じて仕えているレビたちも、もうあなたがたのためには何の役にも立たなくなっているのだ、しかもそれは遠い昔の創世記14章にまで逆上るのだ」といっているわけです。これは大変な問題です。

「すると今までのイスラエルの人たちの信仰は何だったのだろうかということになるわけです。極端なことを言えば『歴史否定』です。そういうことがここで語られているわけです」そしてその後で今度は次のように書くのです。

第⑦節、

「さて、下の者が上の者から祝福を受けるのは、当然なことです」

ここでは「アブラハムよりもメルキゼデクの方が上です」と言うのです。これは丁度、バプテスマのヨハネが言った言葉と同じ意味なのですが、表現が全く違います。バプテスマのヨハネは「あなたがたの先祖にアブラハムがいるのだということは夢にも思っていない、お前たちはアブラハムの子孫ではなく、蝮の子孫だ」と言ったわけです。それは「イスラエル民族の現状を否定した」のです。

ところがその民族によって担がれて来た祭司制度、神殿祭儀というものを今度はこのヘブライ人への手紙は全くぶち壊すわけです。「そういう人々によって担がれて来たのだから意味を失っているのだ」ということをある意味では言おうとしています。さっき私は「祭司という存在は民衆の中であって…、」といったのはそこなのです。祭司制度は、本来は民衆の中に自らが立つことによって意味をもって来るわけですから、その民衆が神から離反しているとすれば、祭司も神から離反しているところに立っているわけです。もはや神の赦しを受ける、執り成しをする存在ではなくなってしまうことを「不完全さ」という言い方で、後で表現していますけれども。

第⑧節、

「更に、一方では、死ぬはずの人間が十分の一を受けているのですが、他方では生きている者と証しされているものが、それを受けているのです」

「レビが十分の一を受けていても、レビは完全ではないのでやがて死にます。あなたがたがどんなに自分の命をあずけてもそのあずかった方が死んでしまうのです。ところがメルキゼデクは命の終わりが無いと言われているので彼がアブラハムに献げた献げ物は永久に有効なのです」と著者は語ります。

あなたがたはレビによって犠牲の儀式が執り行われていると思っているだろうけれど、それは限定付きのものです。どんなに尊敬を受ける立派なレビが出て来てもそれはやがて死んでしまうわけだから、どんなに一生懸命彼を慕い従っても、もうお先真っ暗になるのです。ところがメルキゼデクというお方は命の終わりが無いと言われているのだから、この人に献げた献げ物は永遠に有効なのです。

そして「アブラハムがこの御方にお従いするといった以上、あなたがたもお従いする義務が生じるのです。」と、こう言う論法は私たちが普段に考える中にはないのですけれども。しかし、律法主義の中に生きている人たちには、これは非常に有効だと思うわけです。

ですから何かに捉われて生きてる人がいたら、そういう言い方ができるものを見つけて言えばいいのです。「あなたはそんなものに捉われてるけれども、あなたが捉われてることはやがて消え失せてなくなるのだ、しかし、こっちのものはなくなることはない」と言ってあげればいいのです。

「それはあなたがたの祖先であるアブラハムがそれをやったのだから、それはとっても有効なのだ」、と言えばすごいことなのですけれど。

日本人にはアブラハムと言ったって何も通じないでアブラアゲ位にしか思わないのですから難しいのですけれども。私たちが本当に聖書を読んでゆきますと、「アブラハムの偉大さは旧約の人々が一様に認めている偉大さであるわけで、その偉大な者が屈従したお方なのだ」という論法は非常に鋭い論法なのだとも言えるだろう」と思うのです。

「だから、ヘブライ人への手紙は律法の中で生きて来た人間の発想をしっかりとっていないと理解しにくいですね」

## 第⑨節、

「そこで、言ってみれば、十分の一を受け取るはずのレビですら、アブラハムを通して十分の一を納めたこととなります」

あなたがたが十分の一を献げているレビの代表であるアブラハムが、十分の一をこのメルキゼデクに献げているのです。「そんな馬鹿な」と皆が言ったのに対して著者は答えているわけです。

## 第⑩節、

「なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたとき、レビはまだこの父の腰の中にいたからです」

なぜならレビはイサクの子孫として生まれて来ているけれども、その先祖であるアブラハムが既にこの子どもが生まれるように神に約束づけられていた。

「腰の中にいた」というのはそういう意味なのです。

そしてそのことのゆえに子孫が生まれて来たのだから、レビを含めたアブラハムがメルキゼデクに献げものをしたことになるのだ。

「これは伝承、伝統を重んじるイスラエルにとっては非常に有効な理論です」と、そういう見方、考え方をしているイスラエルに対して、それは違うよと一生懸命言ったのはエレミヤです。「祖先が酸っぱいもの食ったから歯が浮くなどと、とんでもないことはいけない、お前が食べたからだ」と言っているのは、そのことを逆手にとっているわけですが、祖先が献げたのだからお前も献げているということにはならないと言っているわけですが、すごく面白いなと思うのですが、そんなことがここに出て来ます。

「メルキゼデクというのは、そういう意味であなたがたが仕えるべき、執り成しをしてくださる祭司なのだから自分で自分の命を彼にあずけなければならない」と言うのです。

## 第⑪節、

「ところで、もし、レビの系統の祭司制度によって、人が完全な状態に達することができたとすれば、———というのは、民はその祭司制度に基づいて律法を与えられているのですから———いったいどうして、アロンと同じような祭司ではなく、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があったでしょう」

もしも、あなたがたのレビ族の祭司が完全であれば、聖書はメルキゼデクを持ち出す必要はなかった、イスラエルの神はメルキゼデクなんかを考えなかった、けれどもレビ族では十分なことを果たせない部分があることを百も承知だったので、限界をもったレビ族の子孫ではなく、神が特別に任命なさったお方、個人的に選んでくださったお方、メルキゼデクが立てられたのです。

⑪節では、「———というのは、民はその祭司制度に基づいて律法を与えられているのですから———」と言っていますが、さっき述べましたように「律法も不完全ですよ」とも言っているわけです。祭司制度の中の祭司を通して律法にあずかったのだったら、その祭司が不完全であれば、不完全なものの口を通して語られているものも不完全でしかないので。

「律法はあなたがたを贖えないのです。律法は罪の自覚を起こさせ、そこで終わってしまうのです」

神は、私たちに罪の自覚を起こさせて悔い改めさせて神の前に立ち返ること、神の王座に近づくことを求めていらっしゃる。「しかし、祭司制度がどんなに進み、律法がどんなに

立派になったとしても、あくまで罪の自覚に立ち、罪を犯した者として神殿の中に入れない者の代理で不完全な祭司だけが犠牲を献げることになるのだから、あなたがたの罪は完全な形で償われたのではないのだ」と言うのです。とても面白い論理を展開します。56

#### 第⑫節、

「祭司制度に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずです」

ここでいう「律法」とは別な言い方をすれば「契約」という言葉であってもいいと思うのです。祭司制度が不完全だったのでメルキゼデクという祭司が特に置かれたとするならば「当然神との間の契約が『変更されてしかるべきだ』」

「私はこの変更されるという言葉、極端にそういう言い方をしているのですが、イエスの聖書解釈、律法解釈は、正に与えられた御言葉を大きく変更し、更新してもう一度与え直してゆくことです。

例えばイエスが語られた御言葉の中には「敵を愛しなさい」とか、「旧約の中ではこう言っているけれども、あなたがたはそうであってはならない」とか、こうしなさいという言い方をして「その内容の置き換え」をしています。

特に「至福の教え」などはすごいです。貧しいから豊かになるように神を礼拝しなさいという教えが律法の中にあるけれども、イエスは貧しいことが幸せですと言い切るわけです。あなたがたが求めずとも持っている、その<破れ>こそが実は神の憐れみを受けることに必要な要件なのです、という言い方をするわけです。神の前に律法を完全に守った者だけが救われるのではなく、むしろ<破れ>があるからこそ神は憐れんでくださるのだから、その<破れている自分>をありのままに神の前に差し出しなさい。そしてこの<破れ>を憐れんでくださいと言って悔い改めなさい。わたしの力ではどうにもなりませんと素直に認めなさい。そのようなことがこの短い言葉の中に出て来るわけです。その意味で、「律法は変更されるはずなのだ」と言います。

#### 第⑬節、

「このように言われている方は、だれも祭壇の奉仕に携わったことのない他の部族に属しておられます」

アブラハムに祭司として認められたメルキゼデクが、これはレビ族の出身ではなかったことを示しているのです。（ユダ族出身かということも分かりません）

#### 第⑭節、

「というのは、わたしたちの主がユダ族出身であることは明らかですが、この部族についてはモーセは、祭司に関することは何一つ述べていないからです」

これは、モーセの律法ではユダ族の中から祭司が出るなど何一つ言っていないのに、そこから祭司が出た以上は「もはやレビ族から祭司が出るといっている律法も無意味になってしまった」という言い方なのです。

第⑮節、

「このことは、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられたことによって、ますます明らかです」<sup>58</sup>

旧約で約束されていたメルキゼデクと同じ役割を担う御方、主イエス・キリストが私たちの中に立てられ、執り成してくださる以上、もはや古い律法の拘束の中に生きるのではなく、新しい神の律法の中で生きる者になっているのです。古い祭司に寄り頼み、祭儀を行うのではなく、この御方が一回限り御自分の命をかけて献げてくださった犠牲によって、既に神の前に和解が成立しているのです。「あなたがたの行為ではなく」という、ここに来るとパウロの信仰義認と全く同じになってくるわけですがけれども、通って行くプロセスは全く違うのです。

旧約で立てた約束や、決まりや、祭司たちにあなたがたは引きずられて、今日まで生きて来て、それで自分の清さを保証しようとしてきたけれども、それは全く価値を失ってしまったのです、メルキゼデクがすべてを解決してくださる。そのお方が即ちイエスの予型（鏡）なのだという論理の展開をして行くわけです。メルキゼデクという存在はどんな存在かは旧約の中では書かれていなかったもので、この手紙を読んだユダヤ人たちはおそらくひっくり返ったと思うのです。何でこんなことを一生懸命言っているのだろうと私は思うのですが…。

第⑯節からは更にそれを新しい形で展開してっております。「やはりこの大祭司イエス」という発想の中でヘブライ人への手紙をもう一度読んで行く時に、私たちに委ねられている祭司制という大事な役割が、今どうなっているのだろうと考えて見なければいけないだろうと思うのです。<sup>59</sup>

「私たちが祭司である」ということを言おうとすれば、「三つぐらいのことを考えて見る必要があるだろう」と思います。

少なくとも第一は「イエスが十字架の死を通して御自分をすべての人々のために神に献げられたこと」です。「そのように、私たちも自分の全存在を生きた聖なる供え物として神の前に差し出していることがなければ、祭司としての役割を果たすことができない、即ち歴史に対して救いと贖いをもたらすことはできないのです」。

このことは、目的は全く違いますけれどもパウロも言っています。「あなたがたの体を、生きた聖なる供え物として御前に献げなさい、これがあなたがたのなすべき霊的な礼拝である」と。

もう一つの点は、「キリストがすべての人々のために『父なる神に執り成し』をしてくださった。だから私たちが仲間のすべての人々が罪の虜から解放されるように祈ってゆかなければならない」<sup>60</sup>

教会の一つの定型の祈りとなっているのは「神様、どうか私たちの教会を祝してください」です。しかし、それを祈るのは一番最後でいいのです。「主よ、あなたの御心に適うすべての人に恵みが行き届き、そのすべての人が罪から解放されますように、そのために私たちの教会を祝して用いてくださいと祈るのだったらいいのですが、どうもなかなかそうならないで世の中のすべてが滅びても私たちの仲間は救われますように…という形の「祝してください」ではとんでもないことです。

そういう点では今の教会も著者が一生懸命、「あなたがたはちょっと曲がっているよ、間違っているよ」と訴える事柄と同じ間違いをしているのではないかと、律法主義ではないなどと言っているけれども、結構あなたがたも選民思想の律法主義者なのではないかと思うのです。

「私たちは与えられている御言葉が、『現代』という時の流れの中で、いつでもきちんと正しく転換され、現代人に通じる形に置き換えられて実現して行く、そのことのために日々闘ってゆく歩みを続けなければ、教会が教会ではなくなってしまうのではないか」祭司が神殿の奥にいて、ただ皆からあずかったものを神の前に献げて、自分の口を糊塗しているような形で、もしも教会が歩んでいるとすれば、それは滅びに向かった歩みでしかないということになるわけです。

どうしても私たちは「仲間」というのを、「今の時を主によって生かされている仲間ではなく、私が心を許す仲間限定してしまっている」。ですから、すごい極端な言い方をすれば、私たちはあの「良いサマリア人への譬え」を読んでも少しも心が痛まないのです。

「ああ、レビや祭司は悪かった、サマリア人は親切だった。サマリア人のように生きなければいけない、そうだ、私もそう生きている」なんて簡単に片づけるのですけれども本当にサマリア人のように生きているかということ、私たちは敵のためになど生きていないで理解者のために生きているのです。賛同者といつもいたいのです。

サマリア人はユダヤ人にとっては敵だったのですから敵のために彼は生きたわけです。犠牲を払ったのです。払わずにはいらなかったのです。感謝も報いも与えられないことを承知の上で。

私たちの発想の中ではそういう執り成しができないという限界をいつも持っているのではないかという気がするのです。<sup>61</sup>

主の御心に適うすべての人と共に生きる存在になりますように、ということを実際に謙虚に神の前に祈って、憐れみをいただかないと、歩んで行けないのではないかとこの箇所を読みながらしみじみと思われられました。

今日は⑮節迄で、いいところで終わりにしていただいて有難いと思いますけども、⑯節からは、詩篇110篇のお言葉を使って説明を付け加える箇所になるわけです。そこでは贖いの問題とか、王としてのメルキゼデクの問題とかが非常に強調されていくわけですが、今までのところはアブラハムとの対比の中で出てくるメルキゼデクの存在を学びながら、古い律法はもはや意味を失った、古い契約は既に廃った。今や、新しい契約、新しい意味をもった律法があなたがたの中にはあるのだ。新しい祭司が立てられているのだ。その御方イエス・キリストに命をかけて従ってゆくことが最も望ましい生き方なのだと思われている御言葉が今日のところで一応終わると考えていいと思います。その後、更に7章の後半を通してメルキゼデクと、その存在のもう一つの側面を捉えて学んで行こうと思います。

(1997年2月8日)

写者あとがき

(1)回を重ねるごとに畏怖が増します。写書を始める時には微塵も感じなかった責任を感じしめられています。松山幸生先生が特定の場で特定の人々を対象になされた説き明かしを文字にすることは、一言一句を正確に記述すれば良いということではなく、その場に居なかった人々の目にも触れることがありますから、誤解を生まず積意を伝えなければなりません

それには深い広い知識が必要でありました。そのかけらもない私が独りではじめましたら大きな失敗の連続であったと背筋の寒さを感じているところです。

今回も森容子先生の丁寧なご指導、的確な語彙の入れ替え、主語の明確化、句読点等々多面に渡って補正をしていただきました。言葉になりません。感謝でございます。

(2)「あなたがた」について

パソコンソフトがバージョンアップされることは望ましいことですが、文字の選択は一般的を基準にされますので専門用語や微妙な言い回しの言葉が劣後になってしまいます。例えば「あなたがた」と入力すると「あなた方」になります。しかし、聖書は徹底して「あなたがた」です。なぜか。そこには深い意味があったのです。

「あなたがた」とはキリストの恵を受け、神を「父よ」と呼ぶようになった者たちのことです。神によって選ばれ（自分が選んだのではなく）、ある時、聖霊によってその「認識」を与えられたゆえに、救いの奥義が「認識」できるようになった者たちです。

(この文章は「和解の福音」上田光正著p16からの引用です)

過去にうな垂れる暇もありません。自分も早く「あなたがた」の仲間に入れていただこうと願いつつこの写書が続けます。2022年8月30日